

# 児童期の母親の態度や言葉かけが 女子大学生の感情状態や情動表現スタイルに与える影響 —パス解析モデル—

森 下 正 康  
(発達教育学研究科)

稲 葉 春 果  
(発達教育学部11期生)

本研究は、児童期の母親の態度と言葉かけが、その後の子どもの感情状態や情動表現スタイル (emotional expressivity) の形成にどのような影響を与えるかを探ることを目的とした。女子大学生を対象とし、児童期の母親の養育態度と言葉かけ、現在の感情状態や情動表現スタイル、および母親との信頼関係の特徴について質問紙調査をおこなった。記入漏れのない276名のデータを対象とし、因子分析をおこない、尺度を作成し信頼性を確認した。パス解析の結果、次のことが示唆された。(1)児童期の母親の「受容的」養育態度は「信頼の言葉かけ」や「共感の言葉かけ」を高めていた。それに対して、「統制的」態度は「否定的な言葉かけ」を高めるとともに、直接「否定的情動表現」スタイルを高めていた。(2)母親の「信頼の言葉かけ」は、直接「親和的情動表現」スタイルを高めるとともに、母親との「信頼関係」を高めていた。「共感の言葉かけ」は、直接にあるいは「信頼関係」を介して「肯定感情」状態を高め、その「肯定感情」が「親和的情動表現」スタイルを高めていた。それとは対照的に、母親の「否定的な言葉かけ」は、「否定的感情」状態を高め、それを介して「否定的情動表現」スタイルと「うろたえ情動表現」スタイルを高めていた。(3)母親との「信頼関係」は、子どもの「肯定的感情」を高めそれを介して「親和的情動表現」スタイルを高めていた。以上、児童期の母親の言葉かけは、直接、あるいは信頼関係や感情状態を介して情動表現スタイルに影響するということが示唆された。

キーワード：養育態度、言葉かけ、信頼関係、感情状態、情動表現スタイル、母子関係

## 問 題

対人関係における個人の感情表現の特徴は、情動表現スタイル (emotional expressivity) とよばれている (Eisenberg, Gershoff, Fabes, Shepard, Cumberland, Losoya, Guthrie, & Murphy, 2001)。それはパーソナリティの一つの側面であり、一般に、肯定的情動表現スタイルと否定的情動表現スタイルにわけられている (田中, 2009)。従来、情動は喜びや悲しみ、怒りや恐れなどのように激しい感情の動きを指してきた。しかし、最近は情動という概念は幅広く用いられ (須田・別府, 2002)、感情と区別しがたい。ここでも広い意味で情動という用語を用いる。

## 感情状態と情動表現スタイル

本研究において、このような情動表現スタイルがどのように形成されるかという課題に焦点を当てる。これまで、情動表現スタイルの形成について研究は少ない。佐藤 (2004) は、幼児を対象に、図版を示しながら喜び、怒り、悲しみの表情の理解と表出を求めた。その結果、表情の理解については年齢とともにすべて正答率が上昇した。しかし、情動の表出についての正答率は全体に低いものであった。これは幼児期における情動表出は発達の途上にあることを示唆している。

藤井・谷口 (2012) は、大学生を対象にいろいろな感情について普段どのくらいの頻度で経験し感じているかを問い、因子分析をおこなっ

た。その結果、ネガティブ感情、敵意感情、ポジティブ感情の3因子を抽出し、この因子を「感情特性 (emotional trait)」とよんだ。他方、斎木 (2014) は、喜びや驚きなどの感じやすさを「情動特性 (emotional trait)」として、過去20年間の保育系学生の情動特性の変化を分析している。また、平林 (2003) は喜びや怒りのような情動傾向としての母親の「情動特性」と、被養育経験や養育意識との関連を研究している。このような感情特性や情動特性は、いずれも経験し感じている感情状態の特徴を指している。

もったいないと感じやすい感情のパーソナリティ側面を「もったいない情動特性」として研究している黒川 (2015) の場合は、パーソナリティの異なった側面を扱っている。

本研究では、個人が経験し感じる感情の特徴を、感情特性や情動特性との用語の混乱を避けるために、「感情状態」とよぶことにした。また、上記のように、対人関係において個人が示す感情表現や情動表出に関する行動特徴を「情動表現スタイル」とよんで区別する。

感情は、上記のように肯定的な感情 (ポジティブ感情) と否定的な感情 (ネガティブ感情) に大きく分けることができる。ポジティブ感情を経験することが創造的な思考活動や学習機会を増加させるといったような指摘 (鈴木, 2004) や、情動が適応に役立つという指摘もある (奥村, 2008)。

子どもは人間関係のなかで社会に適応する方法を学んでいくが、そのなかで情動の表出が大切な役割を果たす。塙 (1999) は児童期中期に焦点を当て、相手との関係の特徴によって情動の表出が変化し、さらに、怒り、悲しみ、喜びなどの情動ごとに情動表現が異なるとしている。そのように情動や感情状態は情動表現スタイルの基盤にある。

6 か月の子どもと母親の情動表現スタイルについて、男の子のほうが女の子よりも感情制御を持続することがむづかしいことや、母と息子のほうが母と娘よりもシンクロニイ (同期) 得点が高いことが示されている (Weinberg, Tronich, Cohn, & Olson, 1999)。また、顔の表

情の分析の結果、協調性の高い人は協調性の低い人よりもポジティブな情動表出だけでなく、多くの情動表出をおこなうということがわかった (Schug, Matsumoto, Horita, Yamagishi, & Bonnet, 2010)。

### 感情状態と情動表現スタイルの形成

情動表現スタイルは、パーソナリティの重要な側面として、母親も子どももその特徴が周りの身近な人々、とくに家族に与える影響は大きい。Eisenberg たちは、母親のポジティブあるいはネガティブな情動表現スタイルと、子どもの自己コントロールや情動表現スタイルとの関連について一連の研究をおこなっている (Eisenberg, et al., 2001 ; Eisenberg, Valiente, Morris, Fabes, Cumberland, Reiser, Geerssooff, Shepard, & Losoya, 2003 ; Eisenberg, Zhou, Losoya, Fabes, Shepard, Murphy, Reiser, Guthrie, & Cumberland, 2003)。

幼児の母親を対象とした田中 (2009) 研究でも、ネガティブな情動表現スタイルとポジティブな情動表現スタイルにそれぞれ対応する、自己中心的で不快感を与える情動表現スタイル因子と親和的・共感的な情動表現スタイル因子が見出された。ネガティブな情動表現スタイルの母親の子どもは自己コントロール得点が低く、ポジティブな情動表現スタイルの母親の子どもは自己コントロール得点が高かった。このように、子どもに対する母親の情動表現スタイルが子どもの自己コントロールに影響していた。

しかし、森下・福井 (2014) 研究では、女子大学生 (娘) の「親和的情動表現」スタイルは母親の「親和的情動表現」スタイルを高め、娘の「否定的情動表現」スタイルは母親の「否定的情動表現」スタイルを高めていた。このような結果の多くは仮説とは反対であった。そのようななかで、娘の親和的情動表現スタイルは娘と母の信頼関係を高め、母親の否定的情動表現スタイルがその信頼関係を低下させることが注目された。この研究は、母親についても娘の評定によるので、娘の認知した母親像であった。現実には母と娘の間には相互規程的な情動関係が成立しているだろう。

子どもの感情状態や情動表現スタイルの特徴はどのように形成されるか。多くの要因のなかで、子どもにとって最も身近な母親との乳幼児期からの関わりが、それらの形成に大きな影響を与えているだろう。そこで、母親と子どもとのかかわりに焦点を当てたい。

感情状態の特徴について、裴・岩元（2012）の7か月の乳児を対象とした研究では、母親の否定的情動表現が「喜び」の発達を低下させ、「怒り」の発達を高めることを示していた。また、幼稚園児の子どもをもつ母親を対象とした小林（2007）の研究では、母親がよく笑うほど子どもの喜びの表出・自己制御・適切な自己主張が促進され、母親の怒りの表出が多いほど不快感の表出が促進されることが明らかになった。奥村（2005）は、5、6歳児について、喜び・興味・誇り・怒り・悲しみ・恐れ・驚き・嫌悪・照れ・罪悪感の10の情動について、母親がそのような情動を感じやすいほど、子どもも同じ情動を経験しやすいことを示している。

平林（2003）の結果では、「ネガティブな情動」を強く感じる母親ほど、子どものころに「世話」を受けた経験が少なく「過保護」が多かった。また、「ネガティブな情動」の高い母親ほど、「親業に対する不満」や「育児不安」が高かった。このデータは、母親の感情状態の特徴には、どのように育てられたかが影響していることを示唆している。また、床並（2013）の研究では、大学生が喜びや楽しさなどのポジティブ情動を多く感じる背景には、母親が子どもの気持ちを受け止める受容的な態度があることがわかった。**親の言葉かけと情動表現スタイル**

子どもに対する親の具体的な行動の一つに言葉かけがある。親からの言葉かけの内容やそこに込められた感情は、子どもの情動や情動表現スタイルに強い影響を与えるだろう。しかし、このような研究はきわめて少ない。高久（2009）は、親と子どもの要求が一致しない葛藤場面において、親の断り表現（言葉かけ）がどのような影響をおよぼすのかを検討した。その結果、直接的な断り表現よりも間接的な断り表現のほうが子どもはネガティブ感情を抱きにくいとい

うことがわかった。森下・松山（2014）の女子大学生を対象とした研究では、中学・高校時代の母親からの「受容的な言葉かけ」は、母親への「信頼尊敬」を高め、「親への反発」を低下させていた。他方、「拒否的な言葉かけ」はその反対の影響を与えていた。したがって、中学・高校時代に母親の「受容的な言葉かけ」や「拒否的な言葉かけ」のもとで、母親へのポジティブな情動表現スタイルやネガティブな情動表現スタイルが形成される可能性がある。

すでに述べたように、Eisenberg たちは母親の情動表現スタイルと自己コントロールとの関連を研究している。母親の言葉かけと子どもの自己制御との関連について、児童期に母親から自己主張や自己抑制を促す言葉かけが多かった女子大学生は、「自己主張力」が高かった（森下・藤村，2013）。また、児童期における母親の受容的態度は「励まし」の言葉かけを増加させ、それを介して女子大学生の「根気我慢」と「情動抑制」を高めていた（森下・前田，2015）。このような子どもの自己抑制機能と自己主張機能は、子どものポジティブな情動やネガティブな情動の表現に関連している。

本研究において、母親の養育態度や言葉かけ、母親との信頼関係が、子どもの感情状態や情動表現スタイルにどのような影響を与えるかを明らかにしたい。従来の研究から、母親からの言葉かけは、子どもの感情経験の内容に影響すると共に、子どもと母親との信頼関係にも影響し、それらの感情経験と信頼関係が情動表現スタイルの形成に影響すると予想される。そこで、次のような基本的な枠組みを構成した。①親の養育態度が子どもに対する親の言葉かけに影響する。②言葉かけは子どもの感情状態に影響する。③子どもの感情状態は子どもの情動表現スタイルの基盤となる。また、④親の言葉かけは親子の信頼関係に影響し、それを介して子どもの感情状態や情動表現スタイルの形成に影響する。この枠組みに沿って次のような仮説を設定した。

仮説 児童期に母親から肯定的な言葉かけが多いほど、子どもは肯定的な感情を多く体験し、肯定的な情動表現スタイルを形成する。その反

対に、児童期に否定的な言葉かけが多いほど、子どもは否定的な感情を多く経験し、否定的な情動表現スタイルを形成する。また、母親からの肯定的な言葉かけは信頼関係を高め、それを介して肯定的な感情と肯定的な情動表現スタイルが形成される。その反対に、母親からの否定的な言葉かけは信頼関係を低下させ、それを介して否定的な感情と否定的な情動表現スタイルが形成される。

## 方 法

### 1. 調査対象

女子大学の学生279名を対象に質問紙への評定を求めた。そのなかから記入漏れのない276名のデータを分析の対象とした。ただし、そのうち5名は1か所の記入漏れがあったが、評定の中間の得点を入力して分析の対象とした。対象者の内訳は、児童学科の学生176名（1回生103, 2回生68, 4回生5）、教育学科の1回生100名であった。

### 2. 調査時期

平成26年6月下旬～7月上旬。

### 3. 手続き

授業中に質問紙を配布し、現在の母親との関係、普段の感情状態、情動表現スタイル、児童期の親の言葉かけ、児童期の母親の養育態度について、無記名で回答してもらい、原則としてその場で回収した。

### 4. 尺度内容

#### (1) 児童期の母親の養育態度

児童期の母親の養育態度について測定するために、親子関係診断尺度 EICA（辻岡・山本, 1975）の情緒的支持と統制尺度から各6項目ずつ計12項目を使用した（表1）。小学生のころの母親について回想してもらい、「いいえ」「どちらでもない」「はい」の3段階評定を求めた。

#### (2) 児童期の母親の言葉かけ

児童期の母親の言葉かけについて、小南（2009）の尺度から26項目を使用した（表2）。小学生のころの母親について回想してもらい「ぜんぜんなかった」「あまりなかった」「ときどきあった」「よくあった」の4段階評定を求

めた。

#### (3) 母親との信頼関係

現時点における母親との信頼関係を測定するために、森下・福井（2014）から10項目使用した（表3）。現在の母親または、母親に代わる人との関係について、各項目に関して「あてはまらない」「ややあてはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」の4段階評定を求めた。

#### (4) 日ごろの感情状態

日ごろの感情状態の特徴を測定するために、寺崎・岸本・古賀（2010）の「多面的感情尺度」から11項目、清水・今栄（1981）の「STAI 日本語版」から5項目使用した（表4）。自分が普段そのような感情をどの程度感じているか、各項目について「まったく感じていない」「あまり感じていない」「少し感じている」「よく感じている」の4段階評定を求めた。

#### (5) 情動表現スタイル

母親の情動表現スタイルを測定するために、田中（2009）の「情動表現スタイル尺度」を参考にした。これは、田中が Halberstadt の作成した SEFQ を、文化的背景を考慮しながら忠実に翻訳したものである。少しわかりにくい項目もあるので、一部表現を修正した17項目と新しく追加した1項目、計18項目を作成した（表5）。各項目について「まったくない」「ほとんどない」「ときどきある」「よくある」の4段階評定を求めた。

## 結 果

### 1. 尺度の因子分析

ランダムに配列された尺度項目について因子分析をおこなった。まず主成分分析をおこない、固有値の変動（スクリープロット）と説明された分散の値を参考にして因子数を決定した。次に最尤法による因子分析をおこない、最終的にプロマックス回転をおこなった（足立, 2006）。各因子に高く負荷する項目の評定得点の和を尺度得点とし、各尺度の  $\alpha$  係数を算出した。



表1 母親の養育態度の因子と項目 ( $\alpha$ 係数)

第1因子【受容】(.794)
1. 私の悩みや心配事を理解してくれた.
2. 心配事をじっくり聞いてくれるので気持ちが楽になった.
3. 私が困っているときには元気づけてくれた.
4. 一緒にいると気持ちが楽になった.
5. 私と一緒に外出や旅行をするのが好きだった.
6. 悪いことをしたときは叱るだけでなく、なぜそんなことをしたか理由を聞かれた.
第2因子【統制】(.710)
1. 私に何かあるといけなから、あまりよそへ行きさないようにした.
2. 私が長い時間外で過ごすことを認めなかった.
3. 私が何をすべきかをいつも私に指図したがった.
4. 友達とばかり遊んでいないで勉強しなさいと言われた.
5. 少しでも悪いことをしたら怒られた.
6. 私が家の手伝いをしないと腹を立てた.

表4 感情状態の因子と項目 ( $\alpha$ 係数)

第1因子【肯定的感情】(.883)
1. ウキウキした
2. 気分がいい
3. 元気いっぱい
4. 陽気な
5. さわやかな
6. 充実した
7. 楽しい
8. 穏やかな
第2因子【否定的感情】(.844)
1. むしゃくしゃした
2. 沈んだ
3. つらい
4. 腹立たしい
5. 憎たらしい
6. 暗い
7. 不安な
8. だるい

表2 母親の言葉かけの因子と項目 ( $\alpha$ 係数)

第1因子【否定的な言葉かけ】(.906)
1. ダメな子ね.
2. 下手くそね.
3. 何もできないのね.
4. 役に立たないね.
5. 悪い子ね.
6. 頭悪いわね.
7. バカね.
8. 失敗ばかりね.
9. 期待外れだわ.
10. うるさい.
11. 変な子ね.
12. そんなことでどうするの.
13. わがままな子ね.
第2因子【信頼の言葉かけ】(.904)
1. あなたがいてよかった.
2. あなたは大切よ.
3. 大好きよ.
4. いつでも味方よ.
5. 信じているからね.
6. あなたならできと思った.
7. その気持ちわかるよ.
第3因子【共感の言葉かけ】(.855)
1. よくできたね.
2. 頑張ったね.
3. 上手だね.
4. ありがとう.
5. 大丈夫よ.

表3 信頼関係の項目 ( $\alpha$ 係数: .776)

1. 私は母の顔を見るとなんとなく安心できる.
2. 私が元気でなさそうであつたら、母は私を励ましてくれる.
3. 私が考えていることを母はあまり理解してくれない.*
4. 母は私のことにあまり関心がなさそうだ.*
5. 母は私のことを常に思ってくれている.
6. 私は母を失ったら生きる力をなくしてしまうと思う.
7. 母はその日の私が食べたいものをよく心得てくれている.

\*逆転項目

## (1) 児童期の母親の養育態度

この尺度はよくしられた EICA から選択した項目であったが、念のために因子分析をおこなった。その結果、元の尺度と同じような2因子が得られた(表1)。第1因子を「受容」、第2因子を「統制」の因子と命名した(表1)。この因子は、「受容」の反対は「拒否」、 「統制」の反対は「自立性の尊重」を示している。この2因子の $\alpha$ 係数は、表1に示すようにいずれも高い値であった。

## (2) 児童期の母親の言葉かけ

因子分析の結果、いずれの因子にも負荷量が低かった1項目を削除し、再度因子分析をおこない、最終的に3因子を得た(表2)。各因子に高く負荷する項目内容から、第1因子は、ダメな子ね、へたくそね、悪い子ね、などのように否定的な評価を示す「否定的な言葉かけ」の因子と命名した。第2因子は、あなたは大切よ、大好きよ、信じているからね、などのように肯定的な「信頼の言葉かけ」と命名した。第3因子は、よくできたね、がんばったね、上手だね、のようにほめ言葉を伴った「共感の言葉かけ」因子と命名した。この3因子の $\alpha$ 係数を算出したところ、いずれも高い値が得られた。

## (3) 母親との信頼関係

因子分析の結果、いずれの因子にも負荷量が低かった1項目を削除し、再度因子分析をおこない、最終的に2因子解を得た(表3)。第1因子は、母の顔を見ると安心できる、励まして

くれる、のような母への信頼で「信頼関係」の因子と命名した。第1因子の $\alpha$ 係数は.776であったが、第2因子の $\alpha$ 係数は.490が低かったため、以下の分析では使用しなかった。

#### (4) 日ごろの感情状態

因子分析の結果、2つの因子が得られた(表4)。第1因子は、うきうきした、気分のよい、元気いっぱい、などの項目に負荷が高く「肯定的感情」の因子と命名した。第2因子は、むしろしゃした、沈んだ、つらい、などの項目に負荷が高く「否定的感情」因子と命名した。 $\alpha$ 係数はいずれの因子も高い値であった。

#### (5) 情動表現スタイル

最尤法で因子分析をおこなったところ解が得

られなかったので、主因子法で再度因子分析をおこなった(表5)。その結果、3因子が得られ、比較的単純構造を示した。第1因子は、人をほめ、いつも笑顔をつやさず、愛情や感謝の気持ちを素直に表現する情動表現スタイルで、「親和的情動表現」因子と命名した。第2因子は、よく怒り、不満を表現し、相手を責めるという情動表現スタイルで「否定的情動表現」因子と命名した。第3因子は2項目から成り、ひどく失望し、うろたえたりする情動表現スタイルで、「うろたえ情動表現」因子と命名した。この第3因子は、田中(2009)では見られない因子であった。これら3因子に関する尺度について $\alpha$ 係数を算出したところ、高い値が得られた。

表5 情動表現スタイルの因子パターン

	因子負荷量			
	1	2	3	共通性
<b>第1因子【親和的情動表現】</b>				
1. 素敵な人に対して、素敵だねと伝える。	.759	.066	-.018	.577
2. 誰かの夢や計画に感激したときそれを言葉で伝える。	.693	.043	.046	.501
3. よいことをした人を褒める。	.660	.007	.007	.437
4. 好きな気持ちや愛情を素直に伝える。	.645	-.063	.018	.422
5. 悲しんでいる人を励まそうとする。	.542	-.103	.026	.305
6. 快晴の日にその気持ちよさを思わず言葉に出してしまう。	.527	-.034	.082	.301
7. いつも笑顔でいる。	.487	-.136	-.070	.205
8. ささやかな贈り物やちょっとした親切で他者をびっくりさせる。	.472	.175	-.032	.248
9. 親切なことをしてくれた人に感謝の気持ちを示す。	.409	-.033	-.062	.162
<b>第2因子【否定的情動表現】</b>				
10. 人の不注意や過失に怒りを示す。	.009	.778	.006	.609
11. 人のふるまいに対して不満を表現する。	.102	.722	-.092	.488
12. 人の行動に対して軽蔑を示す。	.046	.706	.022	.516
13. トラブルが起きたときに相手をせめる。	-.086	.653	-.048	.488
14. 嫌な人に対する嫌悪を示す。	.004	.630	.012	.402
15. ささいなことでかっとする。	-.132	.544	.103	.358
16. 家族と口論する。	-.049	.305	.056	.110
<b>第3因子【うろたえ情動表現】</b>				
17. 何かがうまくいかなかったときに失望を表す。	.033	.038	.817	.705
18. 失敗などをしたときにひどくうろたえる。	-.023	-.003	.755	.562
寄与	3.204	3.123	1.866	
$\alpha$ 係数	.816	.814	.771	

## 2. 尺度間の相関とパス解析

尺度間の相関を算出した結果、次のような関連がみられた(表6)。養育態度の「受容」と「統制」の間には、低い負の相関がみられた。言葉かけの間では「信頼の言葉かけ」は「共感の言葉かけ」との間に高い正の相関がみられたが、「否定的な言葉かけ」との間には相関がなかった。「共感の言葉かけ」と「否定的な言葉かけ」との間には低い負の相関があった。「肯定的感情」と「否定的感情」の間には低い負の相関が

あった。情動表現スタイルの「親和的情動表現」と「否定的情動表現」の間には相関がなかった。「うろたえ情動表現」は他の2尺度の間に低い正の相関がみられた。

児童期の母親の養育態度、児童期の母親の言葉かけ、現在の母子関係、感情状態、情動表現スタイルの特徴が、相互にどのような関係があるか明らかにするため、Amosによるパス解析をおこなった(小塩, 2008; 豊田秀樹, 2007)。

表6 養育態度・言葉かけ・感情状態・情動表現尺度間の相関

	信頼関係	親和的情動表現	否定的情動表現	うろたえ情動表現	肯定的感情	否定的感情	否定的な言葉かけ	信頼の言葉かけ	共感の言葉かけ	受容	統制
信頼関係	—	.258**	-.160**	.079	.251**	-.177**	-.328**	.530**	.517**	.655**	-.193**
親和的情動表現	.258**	—	-.002	.176**	.484**	-.055	-.027	.313**	.258**	.215**	.044
否定的情動表現	-.160**	-.002	—	.325**	-.072	.491**	.267**	-.002	-.041	-.071	.231**
うろたえ情動表現	.079	.176**	.325**	—	-.024	.396**	.115	.052	.034	-.008	.154*
肯定的感情	.251**	.484**	-.072	-.024	—	-.141*	-.019	.245**	.246**	.193**	-.006
否定的感情	-.177**	-.055	.491**	.396**	-.141*	—	.258**	-.002	-.035	-.124*	.145*
否定的な言葉かけ	-.328**	-.027	.267**	.115	-.019	.258**	—	-.067	-.217**	-.245**	.486**
信頼の言葉かけ	.530**	.313**	-.002	.052	.245**	-.002	-.067	—	.629**	.520**	-.010
共感の言葉かけ	.517**	.258**	-.041	.034	.246**	-.035	-.217**	.629**	—	.531**	-.074
受容	.655**	.215**	-.071	-.008	.193**	-.124*	-.245**	.520**	.531**	—	-.180**
統制	-.193**	.044	.231**	.154*	-.006	.145*	.486**	-.010	-.074	-.180**	—

\*p<.05, \*\*p<.01

仮説に沿ったパスモデルや逆方向からのパスモデルなどさまざまなパスモデルを作成し、パス解析をおこなった。パス係数の有意ではないものから順次1つずつパスを減らしていった。その手順を繰り返して、最終的に得られたもっとも適合性の高いパスモデルが図1である。パスモデルの作成において、「信頼の言葉かけ」と「共感の言葉かけ」には、児童期の母親の態度以外に共通の要因が影響していると考えて、誤差間に双方向のパスを入れた。同じような理由から「うろたえ情動表現」と「否定的情動表現」の誤差間にも双方向のパスを入れた。図1のパス係数は、すべて5%レベルで有意で、適合性の指標は十分とはいえないが、ある程度高い値を示していた。

パス解析の結果、次の点が明らかとなった。

(1) 児童期の母親の「受容」的態度は、「信頼の言葉かけ」や「共感の言葉かけ」を増加させ、さらに母親との「信頼関係」を高めていた。児童期の母親の「統制」的態度は、「否定的な言葉かけ」を増加させると共に、直接「否定的情動表現」スタイルを高めていた。

(2) 「信頼の言葉かけ」は母親との「信頼関係」を高め、さらに、直接「親和的情動表現」を高めていた。また、「共感の言葉かけ」は母親との「信頼関係」を高めると共に、「肯定的感情」を高めていた。他方「否定的な言葉かけ」は「否定的感情」を高めていた。

(3) 母親との「信頼関係」は「肯定的感情」を高めていた。

(4) 「肯定的感情」は「親和的情動表現」スタイルを高め、「否定的感情」は「うろたえ情動表現」スタイルや「否定的情動表現」スタイルを高めていた。

パス図の流れに焦点を当てると、児童期の「受容」的な養育態度は、「信頼の言葉かけ」を増加させ、それを介して、「親和的情動表現」スタイルを高めていた。また、児童期の「受容」的な養育態度は、「共感の言葉かけ」や、母親との「信頼関係」を高め、それらが共に「肯定的感情」を高め、さらに「親和的情動表現」スタイルを高めていた。

一方、児童期の「統制」的な養育態度は、直接「否定的情動表現」スタイルを高めていた。また「統制」的態度は「否定的な言葉かけ」を増加させ、それがさらに「否定的感情」を高め、最終的に「うろたえ情動表現」スタイルと「否定的情動表現」スタイルを高めていた。

母親との「信頼関係」は「肯定的感情」を高め、それを介して「親和的情動表現」スタイルを高めていた。「親和的情動表現」スタイルの説明率は27%、「うろたえ情動表現」スタイルの説明率は16%、「否定的情動表現」スタイルの説明率は26%であった。

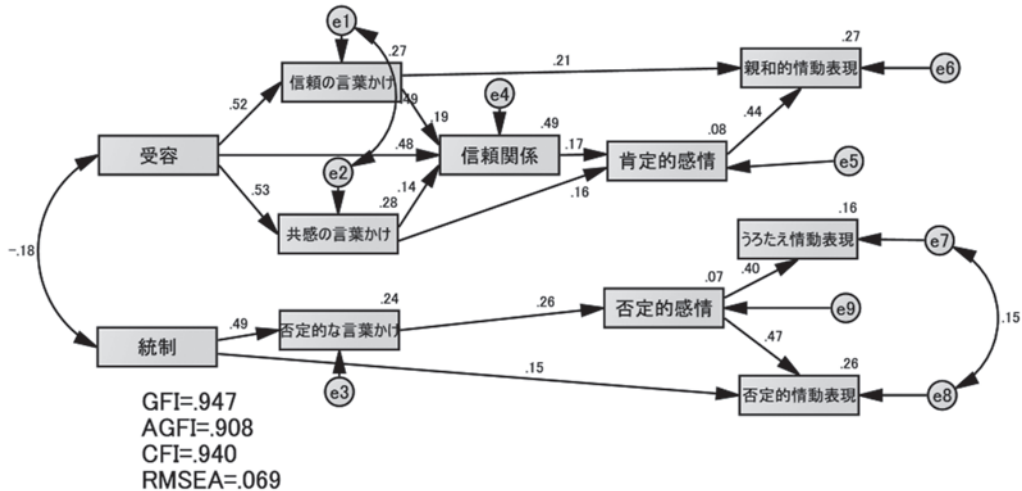


図1 養育態度・言葉かけ(信頼関係)(感情状態)―情動表現スタイルのパスモデル

### 3. 要因間の交互作用

パス解析では直線回帰を想定しているため、説明変数間に交互作用がある場合、必ずしも有意なパスを示さないことがある。そこで、児童期の母親の養育態度や言葉かけが、女子大学生の感情状態や情動表現の特徴に与える影響を明らかにするために、分散分析をおこない交互作用に注目した。そのためにまず、児童期の母親の養育態度の「受容」と「統制」の得点それぞれについて、中央値に基づき、上位(H)群と下位(L)群に分類した。同様に、児童期の母親の言葉かけ因子の「否定的な言葉かけ」「信頼の言葉かけ」「共感の言葉かけ」についてH群とL群に分類した。次に、それぞれ二つの要因を組み合わせ、 $2 \times 2$ の分散分析をおこなった結果、次のような交互作用がみられた。

(1) 親の「受容」と「統制」を独立変数とし、「否定的感情」を従属変数として分散分析をおこなったところ、交互作用に有意な傾向がみられた( $F(1,272)=2.921, p<.10$ )。そこで、Bonferroniの方法(石村, 2006)。によってその後の検定をおこなった。その結果、受容L群(拒否的)において統制L群よりも統制H群のほうが「否定的感情」得点は有意に高かった。また、統制H群において、受容H群よりも受容L群(拒否的)のほうが「否定的感情」得点は

有意に高かった(図2)。つまり、児童期に母親が拒否的(受容が低い)で統制が高い群は「否定的感情」が著しく高いことが明らかになった。

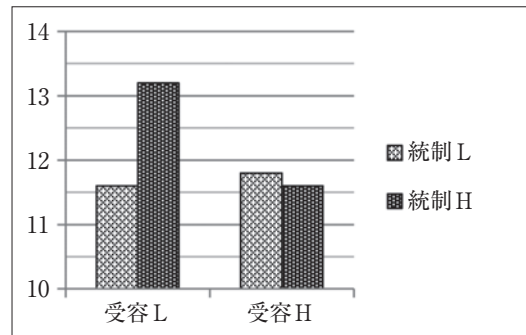


図2 「受容」×「統制」と「否定的感情」

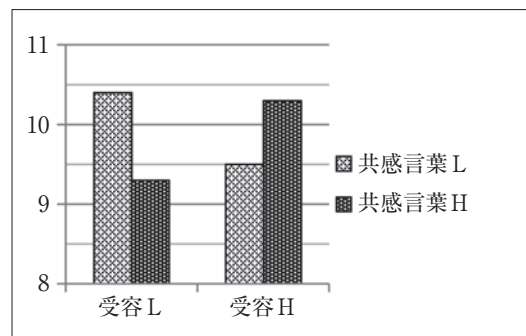


図3 「受容」×「共感の言葉かけ」と「否定的情動表現」



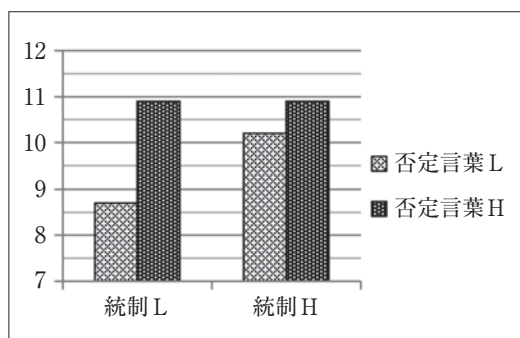


図4 「統制」×「否定的な言葉かけ」と「否定的情動表現」

(2)「受容」と「共感の言葉かけ」を独立変数とし「否定的情動表現」を従属変数として分散分析をおこなったところ、有意な交互作用がみられた( $F(1,272) = 4.268, p < .05$ )。Bonferroniの方法によってその後の検定をおこなった結果、受容L群において、母親からの「受容」が低い(拒否的)場合、母親からの「共感の言葉かけ」が多い群(LH群)のほうが少ない群(LL群)よりも、「否定的情動表現」得点が低いという傾向があった(図3)。つまり、母親が拒否的で共感の言葉かけが少ない群は「否定的情動表現」が多いのに対して、母親が拒否的であっても共感の言葉かけが多い群は、「否定的情動表現」が少ないという傾向があった。

(3)「統制」と「否定的な言葉かけ」を独立変数とし、「否定的情動表現」を従属変数として分散分析をおこなったところ、交互作用に有意な傾向がみられた( $F(1,272) = 3.204, p < .10$ )。そこで、Bonferroniの方法によって。その後の検定をおこなった結果、統制L群において、否定的な言葉かけH群よりも否定的な言葉かけL群のほうが「否定的情動表現」得点が有意に低かった。また、否定的な言葉かけL群において、統制H群よりも統制L群(自立性の尊重)のほうが「否定的情動表現」得点が有意に低かった(図4)。つまり、児童期において母親が自立性を尊重(統制が少ない)し否定的な言葉かけが少ない群は、「否定的情動表現」は著しく低いということが明らかになった。

## 考 察

本研究は、児童期の母親の養育態度や言葉かけが、女子大学生の感情状態や情動表現スタイルの特徴に、どのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とした。

### 1. 児童期の母親の養育態度とその影響

パス解析の結果、児童期における母親の「受容」的態度は児童期の母親の「信頼の言葉かけ」や「共感の言葉かけ」をそれぞれ高めていることが明らかとなった。また、母親の「統制」的態度は「否定的な言葉かけ」を高めていた。このことから、母親の言葉かけの背景には母親の養育態度があるということがわかった。これは、森下・前田(2015)の結果と一致している。

パス解析の結果は、養育態度が直接感情状態に影響してはいなかった。しかし、分散分析の結果では養育態度要因に交互作用がみられ、母親の態度の「受容」が少なく「統制」が多い群、つまり拒否的統制群の「否定的感情」得点が著しく高かった。これは、パス解析にはみられない結果であった。森下(2001)の結果でも、拒否的統制群の女子は自己抑制が弱く、攻撃性が強かった。本研究の結果と共通している。

### 2. 言葉かけと感情状態

児童期における母親の「共感の言葉かけ」は女子大学生の「肯定的感情」を高め、「否定的な言葉かけ」は女子大学生の「否定的感情」を高めていた。同じような結果は、小川・山田・杉山・上岡・平田(2011)の研究でもみられ、親は私を肯定的に受け止めてくれているという認知が自己肯定につながっていた。そのような共感の言葉かけは、自己の肯定感や肯定的な感情を高めていることがわかった。その反対に、子どもを非難するような否定的な言葉かけは、腹立たしい、つらい悲しいというような否定的な感情を高めるということがわかった。

また、「信頼の言葉かけ」は、「共感の言葉かけ」とともに母親への「信頼関係」を高め、それを介して「肯定的感情」を高めていた。それに対して、「否定的な言葉かけ」は、母親への「信頼関係」を介さずに、直接「否定的感情」を高めていることが特徴であった。したがって、否

定的な言葉かけは肯定的な言葉かけよりも子どもの感情により直接的な強い影響を与えるということが示唆される。

### 3. 養育態度や言葉かけと情動表現スタイル

母親の「統制」の態度は直接子どもの「否定的情動表現」スタイルを高めていた。また、「統制」的態度は「否定的な言葉かけ」を介して子どもの「否定的感情」を高め、さらに「否定的情動表現」スタイルと「うろたえ情動表現」スタイルを高めていた。すでにみたように、田中(2009)は、自己中心的な情動表現得点の高い母親の子どもは、否定的情動得点が高いことを明らかにしている。母親の自己中心的な情動表現は「否定的な言葉かけ」を含んでおり、両者は一致した結果といえる。また、笹川・藤田(1992)は、小学校高学年の時期に母親によく叱られた女子学生は自己効力感が低いことを示している。したがって、口やかましい統制的な母親の子どもは自己効力感が低く、そのことが否定的情動表現を高めているかもしれない。

情動表現スタイルに直接影響を与えているのは「信頼の言葉かけ」からの「親和的情動表現」スタイルへの影響だけで、「共感の言葉かけ」や「否定的言葉かけ」は情動表現スタイルに直接影響していなかった。むしろ、情動表現スタイルに強い影響を与えているのは、感情状態の特徴であって、「肯定的感情」は「親和的情動表現」スタイルに、「否定的感情」は「否定的情動表現」スタイルにいずれも強い影響を与えていた。したがって、情動表現の基盤に感情状態があるということが示唆される。ここに、感情状態の特徴と情動表現の特徴(情動表現スタイル)を分離した意義があったといえる。

分散分析の結果、児童期の母親の態度が「受容的」でなくかつ「共感的な言葉かけ」も少ない場合は「否定的情動表現」得点が高かった。他方、母親の態度が「受容的」でなくても「共感的な言葉かけ」が多い場合は「否定的情動表現」得点が低いということを示していた。このことは、否定的情動表現スタイルの形成には、受容的な養育態度の少なさよりも共感的な言葉かけの少なさが関与していると示唆している。

児童期において、「母の統制」も「否定的な言葉かけ」もともに少ない群は、「否定的情動表現」得点が著しく少ないという結果であった。この結果は、パス解析における「統制」と「否定的な言葉かけ」からの直接的、間接的な効果と一致するものであった。言い換えると、親から自立性を尊重され、かつ否定的な言葉かけが少ないなかで育てば、子どもの否定的情動スタイルは形成されにくいといえるだろう。

### 4. 言葉かけと母子関係

児童期の母親の「信頼の言葉かけ」と「共感の言葉かけ」は、ともにその後の母子間の「信頼関係」を高めていることが示唆された。森下・松山(2014)の研究結果は、中学・高校時代の母親の受容的な言葉かけや拒否的な言葉かけのもとで、母親への態度が形成される可能性を示していた。本研究の結果も、同じように、児童期における「信頼の言葉かけ」や「共感の言葉かけ」のもとで母子間の信頼関係が形成されることを示唆している。

その母子間の「信頼関係」は、子どもの「肯定的感情」を高め、それが「親和的情動表現」スタイルを高めることを示していた。母親との信頼関係は、子どもの心の拠り所となり、子どもの心を安定させ子どもの「肯定的感情」を高め、さらに「親和的情動表現」スタイルを高めるといえる。このように、母親との信頼関係は子どもの感情状態を介して情動表現スタイルの形成に影響を与えていると推察される。

以上の結果から、仮説は基本的には支持されたといえる。ただし、以下のように仮説を部分的に修正する必要がある。児童期の母親からの肯定的な言葉かけが、直接、肯定的な情動表現スタイルを高めるとともに、肯定的な言葉かけが信頼関係を介して肯定的感情を高め、それが親和的情動表現スタイルを高める。それに対して、否定的な言葉かけは、信頼関係を介さず、否定的感情を高め、それが否定的情動表現スタイルを高める。

### 今後の課題

本研究では、女子大学生を対象に児童期の母親の言葉かけを回想してもらい、現在の母親と

の信頼関係、自分の感情状態や情動表現の特徴について評定してもらった。そのようなデータを用いて、情動表現スタイルの形成メカニズムを探るためにパス解析をおこなった。しかし、このような回想データは、小嶋（1989）が指摘するように、過去の事実そのものではなく現時点での構成された物語り（認知）である。そのために、過去の認知と現時点での特徴は相互に関連しあっている。また、得られたパスモデルはデータを最もよく説明するモデルであったが、因果関係を証明するものにはなっていない。したがって、因果関係について一つの仮説を提出することになる。新しい発見があったので、得られた仮説は最初の仮説を修正したものになっている。

本研究で得られた、子どもの親和的あるいは否定的情動表現スタイルの説明率は26から27%であった。これは必ずしも高い数値ではない。情動表現スタイルに影響する要因をほかに探る必要がある。その一つとして、母親をはじめとする重要な他者の情動表現スタイルに対するモデリングという要因に、今後、注目すべきだろう（森下，1996）。

研究方法としては、回想法でなく、対象を幼児や児童とその母親とし、縦断的なデータが得られれば、母親の言葉かけが感情状態や情動表現スタイルの形成に与える影響を明らかにすることができるともかもしれない。また、今回は女性を対象とした研究であったが、調査対象を男性にも広げること必要である。さらに、母親と父親のデータを得て、両親の態度や言葉かけが子どもの情動表現スタイルの形成に対してどのような影響を与えるかを明らかにすることによって、新たな展開がみられると予想される。

〈謝辞〉論文作成に当たり、小嶋秀夫先生（名古屋大学名誉教授）から貴重なご意見をいただきました。心よりお礼を申し上げます。

#### 引用文献

- 足立浩平（2006）. 多変量データ解析法—心理・教育・社会系のための入門— ナカニシヤ出版  
Eisenberg, N., Gershoff, E. T., Fabes, R. A., Shepard, S. A., Cumberland, A. J., Losoya, S.

- H., Guthrie, I. K., & Murphy, B. C. (2001). Mothers'emotional expressivity and children's behavior problems and social competence : mediation through children's regulation. *Developmental Psychology*, **37**, 475–490.  
Eisenberg, N., Valiente, C., Morris, A. M., Fabes, R. A., Cumberland, A., Reiser, M., Geerssoff, E. T., Shepard, S. A., & Losoya, S. (2003). Longitudinal relations among parental emotional expressivity, children's regulation, and quality of socioemotional functioning. *Developmental Psychology*, **39**, 3–19.  
Eisenberg, N., Zhou, Q., Losoya, S. H., Fabes, R. A., Shepard, S. A., Murphy, B. C., Reiser, M., Guthrie, I. K., & Cumberland, A. (2003). The relations of parenting, effortful control, and ego control to children's emotional expressivity. *Child Development*, **74**, 875–895.  
藤井昌志・谷口麻起子（2012）. 感情状態と情動への評価の関連性について 聖泉論叢, **20**, 11–23.  
斐 美沙・岩元澄子（2012）. 乳児期早期の基本的情動の発達と活動水準および母親の情動表現性の影響 久留米大学心理学研究, **11**, 85–90.  
塙 朋子（2000）. 児童期における情動経験：怒り、悲しみ、喜び、恥の比較と発達の变化・性差の検討 東京大学大学院教育学研究科紀要, **39**, 301–312.  
平林秀美（2003）. 母親の情動特性と被養育態度・養育意識との関連 日本教育心理学会総会発表論文集, **45**, 240.  
石村貞夫（2006）. SPSSによる分散分析と多重比較の手順（第3版） 東京図書  
小林 真（2007）. 子どもの情動表現傾向の予測因子の検討—母親の情動表現スタイル傾向と養育態度の影響について— 富山大学人間発達科学部紀要, **1**, 13–18.  
小嶋秀夫（1989）. 子育ての伝統を訪ねて 新曜社  
小南早苗（2010）. 子どもの頃の母親の言葉かけと自尊感情の形成について 京都女子大学発達教育学部児童学科卒業論文（未刊）  
黒川雅幸（2015）. 小・中学生のもったいない情動特性が環境配慮行動に及ぼす影響 愛知教育大学紀要, **64**, 85–92.  
森下正康（1996）. 子どもの社会的行動の形成に関する研究：同一視理論とモデリング理論からのアプローチ 風間書房  
森下正康・福井えがお（2014）. 母親の情動表現スタイルが女子大学生の情動表現スタイルと自尊感情や自立心に与える影響—母子の信頼関係を媒介として— 京都女子大学発達教育学研究, **8**, 28–29.  
森下正康・藤村あずさ（2013）. 小学生の頃の養育者からの言葉かけが女子大学生の自己制御機

- 能の発達に与える影響 京都女子大学発達教育学部紀要, **9**, 125-134.
- 森下正康・前田百合香 (2015). 児童期の母親の養育態度としつけ方略が自己制御機能の発達に与える影響 京都女子大学発達教育学部紀要, **11**, 103-112.
- 森下正康・松山紗也 (2014). 中学・高校時代の母親の言葉かけが女子大学生の母子関係に与える影響 京都女子大学発達教育学部紀要, **10**, 103-112.
- 小川由希子・山田智世・杉山里美・上岡美紀・平田裕美 (2011). 父親・母親の言葉かけと青年期女子の自尊感情との関連：影響を及ぼしているのは父親、それとも母親？ 女子栄養大学紀要, **42**, 35-41.
- 奥村弥生 (2005). 母親と子どもの情動特性の関連性 九州大学心理学研究, **6**, 159-166.
- 奥村弥生 (2008). 情動への評価と情動認識困難・言語化困難の関連 教育心理学研究, **56**, 403-413.
- 小塩真司 (2008). 初めての共分散構造分析：Amosによるパス解析 東京書籍
- 斎木久代 (2014). 過去20年における保育系学生の情動特性の変化 聖和論集, **42**, 13-22.
- 笹川宏樹・藤田 正 (1992). 親の養育態度と自己効力感及び自己統制感の関係 奈良教育大学教育研究所紀要, **28**, 81-89.
- 佐藤幸子 (2004). 幼児の情動表出の発達に関する研究—保育の中で生起する対人場面を中心に— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **53**, 289-298.
- Schug, J., Matsumoto, D., Horita, Y., Yamagishi, T., & Bonnet, K. (2010). Emotional expressivity as a signal of cooperation. *Evolution and Human Behavior*, **31**, 87-94.
- 須田 治・別府 哲 (2002). 社会・情動発達とその支援 ミネルヴァ書房
- 鈴木直人 (2004). ポジティブ感情はなぜ必要か？ 心理学ワールド, **26**, 30-31.
- 高久洋平 (2009). 葛藤場面における親の言葉かけが子どものネガティブ感情に与える影響 日本教育心理学会総会発表論文集, **51**, 307.
- 田中あかり (2009). 母親の情動表現スタイルが幼児の気質に及ぼす影響 発達心理学研究, **20**, 362-372.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 (1992). 多面的感情尺度の作成 心理学研究, **62**, 350-356.
- 床並愛子 (2013). 児童期の両親の養育態度が大学生の情動経験や情動表現スタイルに与える影響 京都女子大学発達教育学部児童学科平成24年度卒業研究抄録集, 165-166.
- 豊田秀樹 (2007). 共分散構造分析 [Amos 編] 東京書籍
- 辻岡美延・山本吉廣 (1976). 親子関係診断尺度 EICA の作成—因子的真実性の原理による項目分析 関西大学社会学部紀要 **7**(2), 1-14.
- Weinberg, M. K., Tronich, E. Z., Cohn, J. F., & Olson, K. L. (1999). Gender differences in emotional expressivity and self-regulation during early infancy. *Developmental Psychology*, **35**, 175-188.